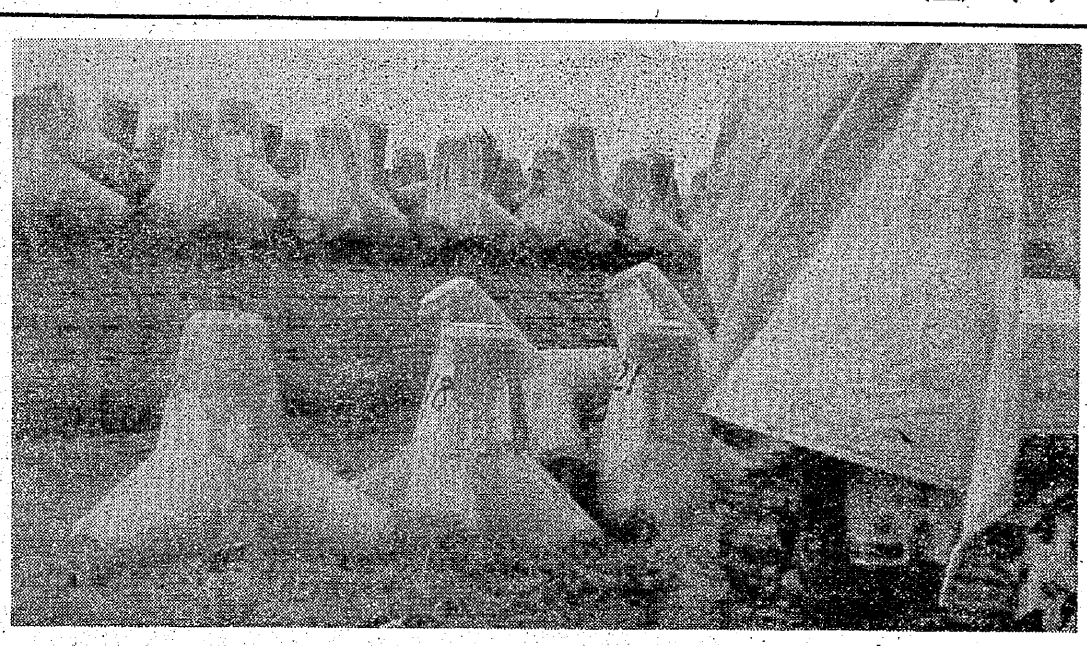


新港社宅の海岸沿いで、問題の工事はつづいている。

被害がでた場合には責任は必ずとる

新港護岸工事で県土木事務所が確約

諏訪・川尻校区連協に

二月二十五日、新港町社宅事務所より、港務・三川の両地域分会に対し、護岸工事施工についての申し入れがあった。

×

県土木事務所より左記の通りテトラポット吊入れ護岸工事施工について、本社総務に要請がありましたので連絡します。

一、工事期間　自昭和五十一年二月二十八日、至同年四月十日頃までの予定。

一、作業区域　堤防大曲りより四百メートルの間。

一、クレーン車導入経路　社宅内二区三区道路。社宅事務所立合いの上通行する。

一、テトラポット運搬経路　海岸線を通行する。

この申し入れは会社、県土木事務所の、まさに住民無視そのものであった。

実際、県土木事務所は会社の了解を受けたからというので、二十八日よりさっそく工事着工。

会社は、社宅は会社の管理下にあり、権限は会社にあるとの態度をとった。

二月二十九日、校区連協は緊急幹事会を開催、対策を立て、県土木事務所に着工のマッタをかけ、社宅住民の意志を無視する行為は許せないとして、県土木事務所に説明を求めた。

三月三日、県土木事務所より代表三名がきて、三川・新港地域闘争本部で説明会を開いた。大衆動員をかけて、いっさいを見守った。

その中で土木事務所への、きびしい追及が続いた。その結果、土木事務所側から「工事は、住民の了解なしにはしないことを約束し、文書で陳謝すること」を述べ、その日は終った。

三月五日は、第二回目の交渉。その中で、住民側から、不安と現実の被害がだされた。

三月十九日、業者・県土木事務所・校区連協三者の立合いによる現地視察。

三月二十九日に第三回交渉。その中で、住民に被害があった場合いっさい県土木事務所がその責任をとることで、了解つく。

いま私たちの連協は、これからは常に意志統一して運動を生かしていくことと共に、覚書にもられた内容の実現をめざし、当局の動きを監視することになった。

×

なお、両者で取り交わされた〝覚書〟の内容は別項の通りである。

覚書

福岡県大牟田土木事務所長（以下「甲」という）と、大牟田市諏訪川尻校区住民協議会議長（以下「乙」という）との間に、大牟田港海岸高潮対策事業、昭和四十年度消波工事に関し、次のとおり覚書を締結する。

（事故防止）

第一条　甲は事故の防止について万全を期す努力をするものとする。

（賠償責任）

第二条　万一事故を生じた場合は甲乙協議し、誠意をもって解決するものとする。

（運搬通路の補修）

第三条　運搬通路については事前に補修し、工事完了後にも補修するものとする。

（車両の通過）

第四条　当該工事に使用する車両は、社宅内を通過しないものとする。

（損失の補償）

第五条　甲は畑および農作物等に被害を与えないよう工事を施工するものとし、万一被害を与えた場合は甲は乙に損失を補償するものとする。

（工事中止）

第六条　工事施工中不都合を生じた場合、甲は工事を中止し乙と協議を行なうものとする。

（協議）

第七条　この覚書きに定める事項およびそのほか疑義を生じた場合、甲乙協議のうえ解決するものとする。

昭和五十一年三月二十三日

甲　大牟田土木事務所
　　所長　岩崎　政広

乙　諏訪川尻校区住民協
　　議長　古沢　栄一

×

（この項　古沢記）

完全失業者125万に

【連合】総理府統計局が発表した二月の労働力調査報告（速報）によると、完全失業者は百二十五万人（季節調整済みで二・〇四％）となり、一九五九年三月の百四十六万人につぐ高水準を記録、二月としても過去最高となった。

しかし総理府は、「完全失業者は頭打ちの兆し」と発表。だが、完全失業率では石油ショック以来初めて前月（二・〇八％）を下まわったものの依然二％台を記録、実際の失業者数はまだ四百万人をくだらない。

発見

年輪

宮浦支部　高橋　保子

いつか遠い日のこと、先輩にこんな言葉をかけられたことがありました。

「どんな大木でも、年輪の少い木ほどもろくて折れ易い」

何となく聞き過ごしていた私に、この言葉の重みを痛い程感じさせてくれたのは、姑でした。

姑は今年八十八歳。見事な白髪の下のしわだらけの顔には、半生を女ひとりで生き抜いてきた厳しさが漂よいます。

姑の、さり気ない言葉の端はしに、私は時おりはっとすることがあるのです。

そこには決して、むずかしい理論も理屈もありません。明治―大正―昭和の三代を、太平洋戦争敗戦後の混乱期を、七人の子供を両脇に抱え、ひたむきに生きてきた母親の姿があるだけです。

年老いて、田舎のバアちゃんでしかない姑。それでいて、どこかおかしがたい重みを感じさせる。これが年輪だなー。私はしみじみ思いながら、わが身をふり返るのです。

「もし私が、姑の年まで長生きできたとしたら。そのときあなたの年輪は……」

炭鉱労働者の妻と呼ばれてやがて三十年。三池主婦会の会員として二十三年を迎えるというのに、自分にいったい何があるというのでしょう。

もし私という木を切って見たら、そこには恐らくごく貧弱な年輪しか刻まれていないことでしょう。中小企業や未組織の労働者の仲間たちの闘いを見聞きするたびに、自分のだらしなさを責めても見ます。

年輪の重みとは、決して知識や年数だけのことではない。それは努力というものの積み重ねなのだ。平凡でもいいから、一生けんめい努力しよう。足を地につけて、しっかりと歩こう。

そう心に誓いながらも、現状から脱皮できないあせりの中で身をもがいている私です。

×　×

牛深釣り行

三川指導部　石田　鈍竿（どんかん）

ある日のこと、仲間たちが家の前で車をとめ、出発の合図のクラクションを鳴らす。

さあ出発。目的地は、天草の牛深。

釣行地のキロ数を等分に割って、割当て安全運転。

到着。

キャップランプの光の中で、救命胴衣など完全着装。

ドドドドーッ。

夜明け前の静寂を破って、エンジンの音がズシンとこたえ、瀬渡し船は白波をけたてて沖合へ。

瀬の手前で、スクリューを逆回転。グーッと波をおさえて静止する数秒間のうちに、機敏に上礁。

まずは、と深呼吸。

「うまいっ」。

空気がこんなにうまいものだとは。たれ彼なく、みんなに吸わせたく思う。

思いおもいに足場をとり、あれほどにぎやかだった仲間がだまり込み、小さなウキに全神経を集中する。

「よーしっ」の声。隣りに居るA君の声にふと眼を向ける。

竿が〝つ〟の字に大きく曲っている。

「クソッ。俺よりも先に」――ぶつぶつでる一人ごと。

間もなくスーッと、俺のウキも水中に吸いこまれて行く。

イチ、ニイ、サン、シイ……。タイミングをはかって合わせる手に、ガクッ。重い手ごたえが、頭のシンまでとどく。

「ぎまーみやがれッ」

形の良いかなりのニザダイに顔がゆるみ、「今日は調子よかぞオ」と、幸運のお神酒をぐっとひと口。柏手打って、海にも一滴。

だが、それから音沙汰なし。

「食いつかんのオ」

食いのとまっている時間を見て昼食。

一個所に輪をつくり、かあちゃん心づくしの弁当をひらき、四方の景気を眺めながらギューッと一杯。

マキエを握った臭い手でつかんだにぎり飯を、がぶり。

「ンマカー」

しあわせ一杯である。欲をいうなら、かあちゃんにもこの味をおぼえさせたいものだ。危険さえなければ、是非連れてくるところだった。

昼からは、変った潮目に乗せて流して行く。だが、何の音沙汰もない。

天候、潮、ポイントの選定、エサなどくり返し考えてみる。どれをとってみても、申し分ない。

「おかしかのオ。あんたも全然当たりなしかん」

声かけると、仲間の顔にもあせりといらだちがみえる。

A君に、しばらくして当たりがきた。

糸鳴りが、小気味よく俺の耳にまでとどく。

「やったぜベイビイ」

網ですくいあげたクロは、本日最高のドデカイ賞物で、一・五キログラムをこえているか。

「こげんかつば、魚の交通事故ていうとたん」

うらやましいやら、やけるやら。

その日帰りの車の中で、自称ベテラン連の反省会。

「パチンコもやめた。酒の飲み歩きもバカらしゅうなった。やっぱし、釣りが第一。新しか魚が食えるし、かあちゃんの顔も以前と違うてきた。ワッハッハッハー」

一同異議なし。

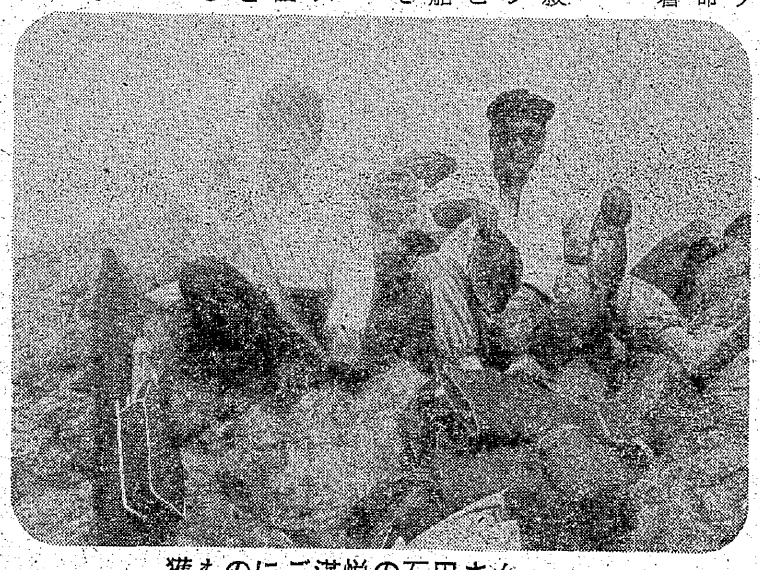
牛深から四時間半で帰宅。

「疲れたでしょう」

かあちゃんの一言は万言にも勝り、いっぺんに疲れが吹っ飛ぶ。

「なんの、なんの」

今夜は、「俺が、おれが」で、話に花が咲くことだろう。



獲ものにご満悦の石田さん
（向つて右側の人）